

郷土博物館・文学館だより

第10回 渋谷現代短歌募集 優秀作・佳作発表

渋谷には、明治時代から現在に至るまで、多くの文学者が住み、近代短歌の発展に貢献してきた雑誌『明星』や『アララギ』も渋谷で発行されました。当館では、こうした渋谷の文学風土を継承し、区民をはじめ多くの方々に渋谷を再発見していただく機会として、年に一度、「渋谷」を題材にした短歌を募集しています。

10回目を迎えた平成21年度は、44名から177首が寄せられました。この中から優秀作5首、佳作4首が選ばれ、作品を書写した色紙は、当館と渋谷区役所中央エレベータ前ホールに展示されました。

5月8日には当館で表彰式が行われました。表彰者の中には、当館主催の文学講座「短歌をつくろう」で経験を積んで挑戦した結果、

受賞に至った方もいらっしゃいました。

平成22年度も10月から短歌の実作を中心とした講座を開講します。より多くの方の講座参加と「第11回渋谷現代短歌募集」への応募を期待しています。



表彰式に出席された入選者の皆さん

第十回渋谷現代短歌く優秀作・佳作く

元聖徳大学教授 逸見久美選

〔優秀作〕

あでやかな衣まといて神宮の

いちようは凜々し秋の夕ぐれ (池田 俊子)

三毛猫がチラリと振り向きミャーと鳴く

君も区民ね代々木公園 (北村 早苗)

待ちし雨に代々木八幡七色の

紫陽花の艶 雫の光 (功刀 國子)

外苑の銀杏黄葉ははらはらと

散りて歩道を真黄色に染める (寺内 佳子)

ギヤル闊歩若者文化と騒ぐけど

大人も憩える渋谷でありたし (渡辺 恒子)

〔佳作〕

八十路越え吾は逢へるのか変貌の

渋谷の工事にバス行きなつむ (上野 竹枝)

空の澄む代々木の森に幼らが

落葉踏み踏み歓声あげる (神田美智子)

朝夕の散歩に昼の森林浴

いつもやさしい神宮の森 (平野 翠)

金色のいちよう散り敷く外苑に

イルミネーション青く瞬く (矢沢 百合)

渋谷の富士山は都内最古？

渋谷区千駄ヶ谷の鳩森八幡神社には、「富士塚」と呼ばれる高さ5メートル程のミニチュアの富士山があります。

「富士塚」は、江戸時代に富士山を信仰対象とする「富士講」というグループによって築造されました。富士講では、年に一度選ばれた代表者が、富士山に登拝しました。しかし、当時の富士登拝は非常に過酷なものだったため、実際に富士登拝ができたのは、体力のある者に限られました。富士塚は、富士登拝を果たせない老人、子ども、女性たちのために築造されたともいえ、ここに登拝することによって、富士登拝と同様のご利益があるとされていました。

都内で最初に築造された富士塚は、新宿区西早稲田1丁目のもので、安永8年(1779)に植木職人の高田藤四郎が造りました。そのため、この塚は「高田富士」とも呼ばれました。彼は、富士山を忠実に模倣するため、シグザグの登山道、五合目の小御嶽社、御胎内の洞窟まで作り、山腹には烏帽子形の巨石を置きました。また、植木屋の用語で「黒ぼく」といわれる富士の溶岩石の塊を富士山麓から取り寄せ、これで山体を包みました。以後築造された富士塚には、これにならって甲州から取り寄せた黒ぼくを用いたといいます。高田富士は江戸で大評判となり、江戸を中心に沢山の富士塚が築造されました。

鳩森八幡の富士塚の築造は、高田富士から10年後の寛政元年(1789)といわれ、現存する都内の富士塚の中では最古のものとされています。しかし、築造年については諸説あります。

まずは、天正年間(1573~91)築造説です。

その根拠は、万治3年(1660)に編纂された『鳩森八幡縁起』で、ここに天正年間に富士峰を築山したことが書かれています。ただし、この縁起の原本は失われており、記述内容の確かさには疑問が残ります。

2つ目は、享保年間(1716~35)築造説です。これは塚の入口にある複数の石造物の銘文に享保の年号があるためです。ただし、これらの年号が刻まれた石造物は、鳥居や狛犬などで、塚自体に造られたものではありません。また享保年間といえば、先の高田藤四郎の富士塚築造から40年ほど前という時期にあたります。

最後が、寛政元年(1789)説です。これは、塚の上に建てられた「小御嶽石尊大権現」の石碑の銘文に寛政元年と刻まれていることにより、現在のところ、鳩森八幡の富士塚築造年は、この寛政元年とする見方がもっとも有力となっています。

都心部の「富士塚」の多くが姿を消してゆきましたが、築造から200年以上たった現在でも、鳩森八幡の「富士塚」は大切に守られています。



千駄ヶ谷鳩森八幡神社の富士塚

島木赤彦と『アララギ』

島木赤彦は、本名を久保田俊彦といい、明治9年(1876)に長野県諏訪郡上諏訪町(現在の諏訪市)に生まれました。長野師範学校の在学中から詩歌に親しみ、小学校の教員を務めていた36年には、長野の同人と歌誌『比牟呂』(『氷むろ』)を刊行します。

- 当時、東京では、万葉調による写生主義短歌を提唱していた正岡子規のもとに、多くの歌人が集まっていました。子規の没後、門下であった伊藤左千夫らによって、雑誌『馬酔木』が創刊され、さらにそのあとを継ぐ形で、三井甲之が編集する『アカネ』も刊行されました。しかし、甲之と左千夫との間に不和が生じたため、41年、左千夫・蕨真らによって新たに『阿羅々木(あららぎ)』が創刊されることになりました。

そうした中、左千夫に師事し、『阿羅々木』の同人とも親しかった赤彦は、『比牟呂』と『阿羅々木』との合流を進めます。42年に両者は合併し、誌名は『アララギ』と改められました。以後、赤彦は左千夫門下の斎藤茂吉・古泉千樫・中村憲吉・土屋文明らと創作活動に励むようになり、大正2年(1913)には憲吉との合同歌集『馬鈴薯の花』を刊行します。そして3年に赤彦は上京し、『アララギ』の編集に専念することになり、13年には代々木山谷に居を移します。

当時のアララギ発行所は、主に赤彦の自宅であったため、15年に赤彦が代々木を離れるまで、『アララギ』は代々木から発行されていたこととなります。

代々木に移った年に刊行された第四歌集『太虚集』には、このころ自宅の近くで詠まれた歌が収められており、「代々木原」という作品には次のような歌がみられます。

夕ごとに澄みまさりゆく空寂し燕もおほく
飛ばすなりつる

当時の代々木山谷は、すでにほとんどが住宅街になっていましたが、赤彦の家から少し離れたところには、広大な敷地をもつ代々木練兵場があり、そこでは昔ながらの代々木原の風景が広がっていました。代々木に移った年、『アララギ』の仲間であった古泉千樫らが同誌を去っており、孤独を感じていた彼の眼に、代々木原はどのように映っていたのでしょうか。

15年、胃ガンであることを知った赤彦は、郷里に戻り、病床に臥していましたが、その年の3月に亡くなりました。赤彦らが育ててきた『アララギ』は、平成9年(1997)に終刊となり、その長い歴史に幕を閉じました。



『アララギ』赤彦記念号
昭和11年9月発行



(群書類従の版木)

文化財紹介

「温故学会所蔵群書類従版木」など

- 群書類従版木 (国指定重要文化財)
- 徒然草等版木 (東京都指定有形文化財)
- 御江戸図説集覧等版木 (区指定有形文化財)
- 温故学会会館 (国登録有形文化財)

温故学会は、盲目の学者塙保己一の遺業を受け継ぎ、明治四十二年(一九〇九)に曾孫塙忠雄氏が保己一の偉業大成を目的として設立した文化団体です。保己一は、その身のハンデイをもともせず、日本の古書、とりわけ散逸の恐れのあるものを版木化し、集録・合刻した大叢書「群書類従」を完成させました。保己一によって、作られた版木の数は、一万七千余枚にもほり、刷り上げられる本の冊数は六六六冊にもなります。

温故学会会館には、保己一らが編纂した様々な版木が保管されており、その内訳は昭和三十三年二月十九日に指定された国指定重要文化財(歴史資料)である「群書類従版木」等が一二三四枚、東京都指定有形文化財(典籍)の「徒然草版木」等が一五四枚、渋谷区指定有形文化財(書跡・典籍)の「版木御江戸図説集覧等」が一〇九

四枚の合計約一万八千五百枚の版木を所蔵し現在に至っています。これらの版木は、今でも現役で活躍しており、頒布するために一枚一枚が手作業で丹念に刷られ、最後に和綴じ装の本となります。

温故学会会館は、昭和二年(一九二七)三月に渋谷栄一子爵をはじめとした各界著名人が寄付などを募り、当時の技術の粋を集めて建てられた全国でも珍しい版木の保存を目的とした収蔵庫です。以来、風雪や震災に耐えてきました。会館は、完成してから今年で八十三年目を迎えます。

その収蔵するところの版木は世界に誇る文化財であり、鉄筋コンクリート造二階建ての会館は、震災によって多くの古い建物を失った区内において、数少ない戦前の建物であります。会館は、平成十二年四月二十八日に国の登録有形文化財(建造物)となりました。

【今後の展示予定】

企画展「明治・大正時代の渋谷写真展」

開催中 平成22年9月23日(金・祝)まで

*明治・大正時代の渋谷の写真を展示します。

企画展「渋谷で飛行機が飛んだ」

平成22年10月2日(土)

～平成23年1月10日(月・祝)まで

*今から100年前、現在の代々木公園で飛行機が飛びました。日本で初めての飛行です。その飛行を記念し、飛行機の黎明期について展示します。

白根記念

渋谷区郷土博物館・文学館

SHIBUYA FOLK AND LITERARY SHIRANE MEMORIAL MUSEUM

開館時間 ◆ 9:00～17:00(入館は16:30まで)

休館日 ◆ 月曜日(休日の場合はその直後の平日)・年末年始

入館料 ◆ 一般100円(80円) 小中学生50円(40円)

※1日以内は10名以上の団体のみ

※60歳以上の方 障害のある方と付き添いの方は無料

お問い合わせ ◆ 東京都渋谷区東4丁目9-1 TEL:03-3486-2791

郷土博物館・文学館だより vol.14
平成22年8月1日発行